

# 十六夜の登る頃

雪楓??

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

もし達也に四葉家の次期当主として、世界的に名高い魔法師である双子がいたら…。  
というifの話です。

魔法科高校の劣等生の作品で、四葉家で女オリ主の作品って無いなあと思ったので書いた次第です。

真夜など、1部大分キャラが変わっている人物がいますがご了承の上お読みください



# 目次

1 2話	1 1話	1 0話	9 話	8 話	7 話	6 話	5 話	4 話	3 話	2 話	1 話
77	68	63	59	54	45	39	34	21	13	6	1

1  
3  
話

# 1話

「それじゃあ、花楓さんお願いしますね」

「わかりました、当主の命令とあらば」

私の言葉に妖艶な笑みをうかべながら、テレビの向こうで頷くのは世界最強の魔法師と名高い四葉真夜。私の母である四葉深夜の妹であり、十師族の一角である四葉家の当主である。

「…さつ、堅苦しいのはここまでにしましょう。」

真夜さんはそう言うのと先程までの威厳をどこかへと捨て、そこら辺にいる叔母と何ら変わらない優しい表情へと変わる。

「…本当にそんなに心配なら、達也たちにも素直になればいいじゃないですか」

先程まで真面目な感じで会話をしていた私たちだが、内容自体は達也たちが高校生活を滞りなく生活出来るというもの。私と達也は同じ日に生まれた双子であり、深雪は約1年離れた妹。私と達也が生まれた時に、どちらが次期当主になるか揉めることは無く、すんなりと私に決まったという。理由は達也の魔法に秘密があるのだが、それが真夜さんが素直になれない理由でもある。

「でも、達也からしたら私や深夜は恨んでもおかしくない相手だし…、深雪さんも達也のことがあるから………」

「達也に恨むなんて感情ないと思うんですけど…」

問題の達也自身は、母の魔法により感情自体がほかの人に比べて薄い。とはいえ、全くないわけではないため周りから見れば感情の起伏が少ししかない大人しいというだけなのだが。

問題は深雪の方にあると言っても過言ではない。超絶シスコン&ブラコンである深雪はどこから知ったのかわからないが、母達が達也にしたことを知っており、頭では理解はしているのだろうが感情がそれを許さないのか、母たちにどこか余所余所しい態度で接している。

そのため、世界最強の魔法師とも恐れられる叔母である四葉真夜はこんなにも消極的であり、彼らに対して威圧的な態度を取ってしまうらしい。

「…そのうち、深雪も許してくれると思いますよ。まあその前に、真夜さんがあの態度を直さない限りは無理でしょうけど」

「…うう」

私の辛辣な一言により、真夜さんは呻き声を上げ椅子に突っ伏してしまった。

「……葉山さん、ごめんなさい。あと、お願いします」

あの状態になった叔母は中々復活しない。

私はこの会話を影で聞いているであろう叔母専属の執事である葉山さんに一言告げてから電話を切った。

「花楓さん、お疲れ様です」

通話が終わった頃合いを計って、私の元へと紅茶を運んできてくれたのは桜井水波。私の専属メイドであり、この家の唯一の同居人でもある。

「ありがと、水波ちゃん。あと、敬語はなして言ってるでしょ？」  
「で、ですが……」

私の言葉に口籠る水波ちゃんの頬を私は両手で掴んで横に引く張る。

「い、い、か、らー！」

「……ふあ、ふあい」

水波ちゃんは横に引く張られている口を懸命に動かしながら、私の言葉に返事をした。私も水波ちゃんの頬から手を離し一口紅茶を啜る。

水波ちゃんは、桜井穂波さんの義理の娘でありその穂波さんは今は達也たちの家でメイドをしている。

本来なら、私の家でメイドをやってくれるはずだったのだが穂波さん本人から、水波ちゃんのことをお願いされてしまったため断れず、穂波さんは私の家から達也たちの家

へと移動したのだ。

「さて、そろそろ寝ましようか。水波ちゃんも明日から学校でしょ？私も総代の挨拶なんかを任せられちゃったから明日早く行かなきゃ行けないし……」

四葉家の次期当主として力を示しなさい。と叔母から命令され、泣く泣く真面目に試験に臨んだ結果なのだが、まさか歴代最高得点をたたき出すハメになるとは思いもしなかった。

元々将輝に誘われ第三高校に行く予定だった私なのだが、真由美さんと十文字さんに熱烈なアタックを受けた上に叔母からの当主命令により第一高校に行く羽目になったのだ。とはいえ、達也も深雪も第一高校であり私の住んでいた場所から第一高校は遠いということと叔母に交換条件として達也たちの近所に家を用意して貰ったのはかなり利点だったと言える。本当ならば一緒に住みたかったのだが、四葉家との関係を隠すため残念ながら、それは叶わなかった。

「そうですね、明日は私も学校の方で仕事があるので少し早く家を出ますので」

「それじゃあ、おやすみ」

「おやすみなさい」

私と水波ちゃんは挨拶を交わして各々の部屋へと入っていった。

(……はあ、明日上手く話せるかなあ)



人見知りである私が新入生を前に上手く話せるかどうかは、私にとって何よりも心配なことであった。

## 2話

(……少し早かったかな)

入学式当日の朝、私は真由美さんに言われた通り新入生の登校時間よりも少し早い時間に学校へとたどり着いた。だが、校門に辿り着いたままでは良かったが周りには殆ど人の気配を感じず待ち合わせをしていたはずの真由美さんの姿も視認できなかった。

「……………うーん、時間間違えてないよね…」

改めて自分の端末から時間を確認してみるが、早過ぎず遅過ぎずといった具合に丁度いい時間であった。

「四葉。こんな所でなにをしているんだ？」

周りをキョロキョロしていた所、よく知った顔に話しかけられた。

「どうも、十文字さん。」

彼の名前は十文字克人。巖のような風貌に加え、性格もかなり大人びているため同年である同じ十師族である真由美さんと同じ年齢ということを疑いたくなる。

「ところで、真由美さん見かけませんでした？出迎えてくれる約束だったんですが…」

私がそこまで言ったところで十文字さんは大きいため息を吐き、呆れたような顔に変

わった。

「…七草なら多分まだ来ていないのだろう。代わりに俺が案内してやる」

十文字さんは振り返り「すまないな」とだけ言うのと、そのまま歩き出した。元より、真由美さんと正反対に物静かな人ではあるがこれから挨拶をしなくてはならない新入生の緊張を解してあげようという気遣いはないらしい。



十文字さんの後を着いて行くこと数分、無言のまま会場へと辿り着いてしまった。

到着して改めてわかったのだが、やはりまだ真由美さんは来ていないようだった。十文字さんの姿が見えたのか、準備をしていた一人の女性徒がこちらに向かって歩いてきた。

「十文字さん、どうしてこちらに？」

「新入生総代が校門のところであたふたしてたのでな」

そう言うのと十文字は私を指差し、相手に「よろしく頼む」と一言いうとそのままどこかへと歩いていってしまった。

「……………あ、えーと四葉花楓です」

無言の間に耐えきれず自己紹介をしたのはいいのだが、私にはそれが限界だった。

「生徒会会計の市原鈴音です。申し訳ありませんが、会長はまだ到着してないのでもう少し待って貰えますか？」

「……………あ、はい」

市原先輩はそのまま私の元を離れ、途中で投げ出していた準備の続きを始めた。

(……………どうしたら……)

周りに知っている人もおらず、周りにいる生徒からはチラチラ見られるこの状況は見知りの私にとって地獄ではない。

そんな状況は良くも悪くもある人物の登場によって、解消された。

「遅れてごめんなさい！」

大きな声で謝りながら会場へとは入ってきたのは、先程の十文字先輩ととても同い年には見えない容姿をした真由美さんだった。

「あ、花楓ちゃん!!」

真由美さんは私の姿をその視界に捉えるなり、周りの目など気にすることなくこちらへと突撃をしてくる。

「どうも、七草さん」

真由美さんの突撃を片手で防ぎつつ、敢えていつものような真由美さんではなく苗字である「七草」で呼んだのは私の心情によるものだろう。

「花楓ちゃん、七草ってなによ！七草って!!いつも見たく、お姉ちゃんって呼んでくれてもいいのよ?」

周りに生徒会の生徒しか居ないとはいえ、生徒会長がこんな姿を晒しているものなのかと少し戸惑いは感じたが聞き捨てならない台詞をそのままスルーすることは出来なかった。

「そんな呼び方1度もしませんでしたよ、七草さん」

私の七草さん呼びに再度反論をしようとする真由美さんだが、それは叶わなかった。

「会長。会長のせいで時間が押しているんです、早く始めますよ」

市原先輩にそう言われて、真由美さんも私の元から離れた。

「おっほん、それじゃあ四葉さんよろしくね」

「分かりました」

入学式20分前にして漸く、簡単な予行が始まった。



「それでは新入生総代四葉花楓さん。挨拶をお願いします」

四葉という苗字にぎわめく会場。

確かに世間一般的に四葉は「触れてはならない一族」なんて呼ばれるぐらい恐れられていると言える。そんな一族の息女が堂々と名乗り、入学してきたとなれば驚くのも無理はない。

だが、私にとってはそのぎわめきよりも、有望な魔法師の卵たちが集まる第一高校の入学式というのは生徒だけではなく、無駄に魔法師協会の役員やら十師族の人達やらが来るせいで余計に人が多いことのほうが辛い。

私は壇上に辿り着くなり、出来る限り人の顔が見えないように斜め上を見上げながら答辞を述べた。

「穏やか春の日差しに—————」

予め貰っていた台本。そんなもの最初から存在しなかったかのように私は自分自身が思ったことを素直に述べることにした。

”入試の成績など、ただの指標に過ぎない”や”一科生も二科生もお互い高めあつていこう”など。

「—————新入生総代 四葉花楓」

そう締めくくると私の思いとは裏腹に、会場は大きな拍手に包まれた。ここでこのまま退場すれば、私としては100点満点の答辞で終われるのだが残念ながらそれは叶わない。

「えっと、最後に答辞とは関係がないのですが少し私の話を聞いて貰えたらと思います」  
私がそう言うのと先程までの大歓声も収まり、会場が静寂に包まれる。それこそ、魔法師協会や十師族の人たちは先程までとは比べ物にならないぐらい私の方に注目している。

「……………それでは、改めて自己紹介をさせてください。私は四葉家次期当主の四葉花楓です。そして、氷月真宵とも言います」

私が2つ目の名前を告げた途端、会場全体から息を呑む音が聞こえた。「氷月真宵」とは、謎に包まれた戦略級魔法師の1人であり世界最強の魔法師と言われている人物。

何故このタイミングで発表したのかは、言うまでもなく叔母である真夜さんとの約束だから。16歳になったところで、次期当主であることと戦略級魔法師であることを世間に公開する。それが私に対して唯一真夜さんが強制したことでもある。軍属の達也とは違い、滯さんと同じく割かし自由な私だから出来ることでもある。

「えっと、氷月真宵というのは皆さんが想像している氷月真宵であっています。魔法師協会の皆さんにはこのことは黙っているとはいけませんし、むしろ公開して頂いて結構

です。お時間頂きありがとうございます」

そうやって私は壇上から降りた。先程とは違い、会場は静寂に包まれたままだった。



## 3話

入学式も無事？終わり、各自自分のクラスを確認しICカードを受け取って和氣藹々している中私は周囲からの視線に晒されていた。

(はあ…、こうなるよね)

元々、16歳になった時に公開することが決まっていたとはいえ、いざ公開してみるとやはり後悔が残るのは仕方がないことだった。

あの沖縄での防衛戦の際に私と達也は戦略級魔法師となったが、私も達也も年齢が年齢だったため真夜さんの圧力によって非公式の戦略級魔法師となった。その際は次期当主であることにより軍属にはならず、達也は軍属になった。

それで済めば良かったのだが、対外的に優位に立ちたい国としてはあの戦争の幻となりつつある【摩醯首羅】と【氷帝】の存在をそのままにしておくはずもなく、しつこい政府に折れた真夜さんたちが私の方だけを公開することで約束を取りつけた。その際の真夜さんたちの謝りようには驚いたのは懐かしいものだ。その約束をこちらが破棄しないように、政府は氷月真宵という名の戦略級魔法師を対外的に公表。しかし、その実は殆ど秘密に包まれており幻の戦略級魔法師とまで呼ばれていたのだ。

何はともあれ、戦略級魔法師に話しかけにくいのはわかるが見世物のようにジロジロ見るのだけはやめて欲しい。

「……あ、真由美さん」

入学式初日なので早々に帰り支度を済ませ、廊下を一人歩いていると前の方から真由美と生徒会の方が何人か歩いてきていた。

「あ、花楓ちゃん。すぐにいなくなっちゃうから探したのよ？」

前から歩いてきた真由美さんは周りの生徒がいるせいかな、いつもよりはその威厳のようなものを感じられた。

「あ、すみません。少し人目に付く場所から離れたかったので……」

「……そ、そうね。私でも驚いたもの、花楓ちゃんがあの氷月真宵だったなんてね」

真由美さんは少し詰まったもののいつものような明るい口調で言ってくれる。

元々四葉家というだけでも関わりにくい私に、さらに幻の魔法師という事実が加えられてしまえば一般生徒としては対応に困るのは致し方ないし、同じ十師族の真由美さんですら戸惑うのだから周りから私を見ている生徒たちに罪はないのかもしれない。

「以前と変わらず接して貰えると嬉しいです……」

としおらしい言い方になってしまったが、これが意外と効果があったらしい。

目の前の真由美さんはもちろん、周りにいる生徒の先程までの少し怯えたような眼差

しが和らいだように感じた。

「え、あごめんなさい。そんなつもりじゃなくて…ね?」

真由美さんは少し焦ったように私の体を優しく抱きしめながら、上目遣いでそう言うが周りに人がいることをお忘れではないだろうか。案の定、後ろにいる生徒会の男子生徒なんて顔を真っ赤にしている。

「あ、あの真由美さん?」

「…あつ、ごめんなさい」

真由美さんも周りの存在を思い出したのか、私の身体から即座に離れ先程までの威厳のある態度へと戻る。

「…おっほん……。本来は用事があったのですが、また明日にしましょう」

「いえ、私は別に…」

真由美さんが何故そんなことを言ったのか理由は分かったので、私は敢えて自分は大丈夫だという意思を伝え、真由美さんがここから立ち去れないようにしようと思った。だが、そう言った悪戯心でこの人に叶うはずもなかった。

「いえ、周りの方々も花楓ちゃんと話したいでしょうから。本日のところはお暇させていただきます」

真由美さんは私の意図を理解した上で、余計な一言を付け加えるとそのまま一礼して

生徒会のメンバーと共にその場から立ち去る。

(……………そんなあ)

先程しおらしい言い方をして効果があつたなんて思った自分を消し去りたかつた。

真由美さんが余計な一言により、話しかけようか迷っていた人達をも巻き込んでくれたおかげで私は押し寄せる人波に飲み込まれることとなった。

◇◇◇◇◇

(……………エライ目にあつた)

記者やら、魔法師協会の人達に囲まれる覚悟こそしていたもののまさか一般生徒たちこんな形で取り囲まれることになるとは思っていなかった。

「先ほどは大変そうでしたね、お……四葉さん」

へトへトになつていた私にそう話しかけてきたのは深雪である。

学校では他人のフリをしるという真夜さんからの指令をきちんと守ろうとしているからか、少し違和感を感じたがさほど気になるほどでもなかった。

「いやあ、流石に驚いたかな。司波さんこそ、取り囲まれたりしなかつた?」

入試成績上位2名ということもあるため、少し面識があるぐらいは大丈夫だとは思うがあまり慣れ親しんでいるのは疑われる可能性があつたため、お互いに苗字で呼んだ。

「ええ、四葉さんとお兄様のおかげで。それと、私のことは深雪とお呼びください」

「わかったよ、深雪。それじゃあ、私のことも花楓って呼んで？」

「ええ、わかりました。それでは花楓さんと呼ばせてもらいますね」

いつもの様にお姉様と呼ばせる訳にはいかないため名前を提示したのだが、あえてそこで呼び捨てにしてこなかったのは深雪なりの意地なのだろう。

「えっと、そつちの深雪のお兄さんは……」

流石に達也とも面識があるというのはかなり無理があると思ったので、ここで初対面にしておく方がいいだろう。

「……司波達也だ。達也でいい」

達也は私に初対面扱いされたことがショックだったのか、一瞬絶望したような表情をしたが直ぐに切り替えた。

「(……達也も大概か) 私も花楓でいいよ。よろしくね、達也」

「……ああ」



達也との自己紹介を終えたところで達也たちの後ろにいた、3人とも自己紹介を交わした。千葉エリカに西城レオンハルト、そして柴田美月。全員E組ということで達也に

しては珍しい相手だなあとは思ったが、全員いい人そうなので一先ず安心した。

「でも、花楓がああ四葉でしかあもあの氷月真宵だなんて思えないわよねえ」

「わかるぜ、それ。俺はてつきりもつと冷たい感じの奴だと思つてたぜ」

(……そんなイメージだったの？私)

改めて周りからの自分のイメージを聞き、落ち込みそうになるが前を歩く達也と深雪の肩が震えているのが見えて少しその気持ちも和らぐ。

その後も、西城くんとエリカが私の話題を永遠と話し続けた。時々、深雪と達也が反応していて面白かったのは私だけの秘密である。

「それじゃあ、私達はこっちだから」

別れ道に差し掛かったところで深雪がそう言うのと、エリカたちとはここで別々になるらしく上手い具合に二手に分かれる。

「じゃあ、私も深雪たちと同じだから」

「そっか、じゃあね」

私たちは軽く挨拶を交わして、それぞれ帰路へと着いた。

そこから、他愛ない話をしながら数分歩いたところで深雪の我慢が限界に達した。

「お姉様っ！」

そう言うのと私の腕へと抱き着いてくる深雪。我慢していたとはいえ、道端でどうかと

は思うが。

「深雪、ここ道端だよ？」

深雪は私の言葉には耳を貸すことなく、腕から離れようとはしない。

(……まあいいつか。悪い気しないし)

「それより、花楓の家ってこっちなのか？」

私が腕に抱きつく深雪を堪能していると、ふと達也がそんな質問をしてきた。

(…そう言えば、達也たちは知らないのか)

穂波さんには伝えていたため、達也たちにも伝わっているものだと思ったのだがそうではなかったらしい。

「達也たちには言っただけで私の家、達也たちの家の2つ隣だよ」

本当は隣が良かったのだが、それだと怪しまれる可能性が高いということでもギリギリ了承されたのが2つ隣。もはや、2つでも1つでも変わらない気もしなくもないがそこで反論するのも野暮であるというものだ。

「そ、そうか。それなら、CADの調整も出来るな」

「確かに、最近自分でやってたから達也にお願ひしたかったんだよね。やっぱり、自分じゃ天下のトールラス・シルバーの調整には及ばないからね」

自分でも出来ないことはないが、それでも上手い人が近くにいるならばそちらにお願

いするのが世の常である。

そんな話をしているうちに、家の近くへと着き私は深雪を達也へと預ける。

「それじゃあ、またね。近いうちに、穂波さんの料理食べにそつちに行くからその時はよろしく。あと、深雪も抱き着くのはこれつきりだからね？どこで誰に見られてるかわからないから」

深雪はあからさまに落ち込むが、これを了承してしまつては別々の家に住んでいる意味がなくなつてしまう。

「他人の目のない家では今まで通りでいいから…ね？」

私が優しく深雪の頭を撫でながら、そう言うと深雪も笑顔をほころばせる。

「それじゃあ、達也、深雪。また明日」

「ええ、ご機嫌ようお姉様」

「ああまたな」

挨拶を交わすと達也と深雪は再び自宅へと歩を進め、私もまた自分の家へと入った。



## 4話

入学式の翌日、日本政府は対外的にも戦略級魔法師【水月真宵】の正体が私【四葉花楓】であることを発表した。

幻とされていた戦略級魔法師【水月真宵】の正体が日本政府から公表されたことは世界各国を驚かせるには十分過ぎた。

理由は幾つかあるが、1つは今までこの国もその尻尾する掴めていなかった正体を政府が公表したということであり、尚且つそれがある意味悪名高い四葉家の次期当主であること。そして、1番の大きな理由は水月真宵が使うとされる戦略級魔法の存在が確実なものとなったことである。今まで、幻の存在であったためその戦略級魔法も非公認のものとしてきたため世界最強の威力を誇る戦略級魔法はアメリカの戦略級魔法師【アンジー・シリウス】が使うとされる【ヘヴィ・メタル・バースト】とされていた。だが、それを上回る威力とされるのが私の使う戦略級魔法【絶対零度（アブソリュート・ゼロ）】であり、その存在が確実なものとなった今、日本は世界に対して優位に立ったということになる。

（これで実質的に、日本は対外的に優位に立ったのかな？）

朝のニュースでは日本政府の突然の発表を大々的に報道している。

未だに社会が魔法師に大して良い印象を抱いていないとはいえ、戦略級魔法師というのは否が応でも興味を惹く話題なのだろう。

「凄いですね」

そう言うのは私と共に朝食を取りながら、テレビを見ている水波ちゃん。こうして、一緒に朝食をとるまでにどれだけ苦労したことか。

「確かにねえ。でも、あの魔法ってちょっと収束系の魔法が得意なら誰でも出来るし」  
「……いえ、無理ですよ？それは」

水波ちゃんに即否定されてしまったが、私は本気でそう思っている。事実、「絶対零度」は指定した空間の大気の熱運動を停止させることによる範囲魔法。簡単に言えば、深雪の「ニブルヘイム」の上位互換である。

「それに威力って意味なら、達也の【質量爆散】の方が上だと思うけど。被害的には変わらないけど…」

「達也さんは非公式ですから…」

私の発言に呆れ返る水波ちゃんを見て、これ以上は何も言わない方がいいだろうと思っただ。

「まあ使うことがない方がいいんだけどね、戦略級魔法なんて」

「……ですね」

「さ、それじゃあ学校行こっか」

私はテレビを切り食器を下げ、身支度を整えに自室へと戻る。

(……はあ、億劫だ)

制服に着替えたことである意味現実へと引き戻され、私は学校での周りからの反応を想像して少し落ち込むこととなった。

◇◇◇◇

水波ちゃんとも別れ、1人通学路を歩く私は残念ながら私の予想したように周囲の目に晒されていた。

大きな液晶に映されている顔がその辺をあるいていけば、そちらに目が向くのも仕方がないような気もするが少し遠慮があってもいいのではないだろうか。

(……有名人の気持ちが少しわかった気がする)

分かりたくもなかった気持ちは、私の歩みをさらに重いものにした。

◇◇◇◇

(……さて、寝ますか)

そこまで距離がある訳でもない学校までの通学路のはずなのだが、異様なまでに遠かった道のりは私の心身を疲弊させるには十分だった。私は一般生徒よりも早く学校に着いたため、手早く履修登録を済ませ机に突っ伏して寝ることにした。理由は言わずもがな、大勢に話しかけられるのを防止するため。

「……おやすみなさい」

誰に向けた訳でもないが、恒例となつている挨拶を一人呟き私は軽く意識を沈めるところにした。

「……さん、えでさん、花楓さん！」

気持ち良く眠っていた私は身体を揺さぶられたことにより、目を覚ますこととなつた。

(……むう。誰？私の睡眠の邪魔をしたのは)

ことと次第によつてはその人とは金輪際接点を持たないまで有り得る。そう思ったが、その考えは相手の顔を見て即座になくなった。

「……ありや、深雪?どうしたの?」

「おはようございます、花楓さん」

いくら睡眠の邪魔をされたとはいえ、それが妹であるなら許してしまうのが姉であるというものである。

「それで、何かな?深雪」

私の寝起きが悪いと知っている深雪がわざわざ起こすのだから、それ相応の理由があるのだろう（なくてもいいのだが）と思った私は一応聞いてみた。

「いえ、私がではなくクラスメイトの方々が花楓さんとお話がしたいと……」

「……………はい?」

深雪のまさかの裏切りに、私は反応が遅れた。だが、深雪の引き攣った顔を見て深雪も苦労したことがわかった。

（……………さようなら、私の安寧）



クラスメイトとの会話もとい、尋問はHRが始まるまで続いた。それで終われば良かったのだが、深雪のお陰で崩れ落ちた私の安寧は、折角の達也との時間まで奪われかけていた。

「四葉さん、どこに行きましようか？」

「やはり闘技場ですか？」

「いや四葉さんのことだ、工房ですよね？」

などなど、深雪とともに達也たちの元へ行こうと思っていた私たちの思惑は残念ながらクラスメイトたちによって阻まれていた。

「えっと、だから私は深雪と……」

「もちろん司波さんも一緒にですよね！」

先程からこれの繰り返し。いい加減、私の話も聞いて欲しいものである。

「だから……」

「私は花楓さんと2人で回りたいんですが、よろしいですよね？」

深雪の一言はクラスメイトたちには効果抜群だったようで、みんな先程までの勢いを失い1歩後ろへと下がる。

「さ。行きましようか、花楓さん」

「あ、うん」

未だに動けないクラスメイトたちを置いて、私と深雪は2人で見学へと向かった。



二度あることは三度ある。とはよく言ったもので、今日という日は私にとって厄日なようである。

深雪のおかげで回避することが出来たのが1度目、元々約束していた達也たちの昼食のときに2度目が。そして、達也たちと帰ろうとしている今、3度目が起ころうとしている。

元々第1高校には選民意識があると聞いてはいたが、こうして自分自身が体験するものとは思ってもいなかった。

「それにしても、あの子達もしつこいね」

「ええ、お姉様に迷惑をかけるなんて万死に値します」

「いや、それはやらなくていいからね？」

深雪がお姉様呼びしていられるのも、一科生であるクラスメイトたちと友人である二科生のエリカたちが大声で言い争っているからである。

理由は言うまでもなく一科生たちの選民意識から来るものらしく、私たちが二科生であるエリカたちと一緒にいるのが気に食わないらしいとかなんとか。だが実際のところは、深雪に近づきたいという下心が1番なのだとは私は思っている。

(私か達也よりも強くない人に、深雪はあげないけどね)

深雪のことを考えても、今のところ任せられそうなのは達也ぐらいしかいないが達也は兄妹であるから結婚は無理。そうなつてくると、あとは一条くんぐらいだけど彼はヘタレを直さない限り可能性はないだろう。

達也にも幸せになって欲しいが、中々達也に良さそうな相手というのも見当たらず未だにおすすめの人物は発見できてない。

(……うーん。達也なら、水波ちゃんもありかなあ。でも、達也なら年上でも……!?それなら、穂波さんがいるじゃない!達也と結婚してくれたら、義姉つて呼べるし一石二鳥……?)

思いがけない伏兵の存在に気がついた私は場違いなほどテンションが上がっていた。

「……花楓、大丈夫か?」

それこそ、達也に心配されてしまうぐらい。

「え、あ、うん。それよりも、そろそろ止めないと……」

先程から木陰から真由美さん達が見ているのには気が付いていたが、中々出てくる気配はない。

そろそろ止めようかと思ひ、前に出ようとした時だった…

「深雪さん、花楓さん!そんな隣に立つてるだけの冴えない二科生の奴よりも俺たちと帰りましょうよ!!」



一科生軍団の1人の生徒の言葉だった。

「入学したてで、あんた達と私たちでそんなに差があるとでも?」

「なんだ、ウィードのくせに!!」

エリカの挑発じみた言葉に頭に血を上らせた一科生の何人かが各々のCADをエリカたちに向ける。

だが、私にはそんなことすら関係がなかった。

「……冴えない?」

私の前で達也を馬鹿にするとはいいい度胸である。

次の瞬間には周りが“夜”に包まれた。

「……誰が冴えないのか、詳しく教えて貰えるかな?」

昼の時もそうだったが、流星に達也のことを馬鹿にされて黙っていられるほど私も大人ではない。

「……そこまでだ」

達也の低い声が聞こえたと同時に、私の発生させた“夜”は消滅した。

「……………冗談よ。それよりも、達也【術式解散】使えるんだね」

幾ら手を抜いた【流星群】とはいえ、こうまで簡単に消されてしまったのは癪だったのでわざと真由美さん達に聞こえるように言った。とはいえ、今のは【術式解散】では

なく【雲散霧消】だが。

それから少ししたところで、真由美さんと摩利さんが到着する。

「花楓ちゃん、これはどういう状況？」

真由美さんたちは今ここに来たということを中心張りたいのか、腰を抜かしてる一科生たちを見て驚いたように私に聞く。

「見てましたよね？真由美さん。まあいいんですけど、彼らが私の友人たちを馬鹿にした上に、魔法を使用しようとしたので少し脅かして止めた迄ですよ」

実際のところ違うのだが、先にCADを構えたことを考慮した最もらしい理由を取ってつける。

「そ、そう。でも、少しやりすぎかなあって」

「……摩利さんもそう思いますか？」

「ああ、少々な」

「そうですか。ごめんなさい」

摩利さんにもそう言われては謝るしかなく、私は一応形だけ謝る。

「それでは、花楓とその子以外の1—Aの生徒たちは話を聞くためについてきてもらおうか」

摩利さんの言葉に腰を抜かしながらも、驚きの表情を浮かべる一科生たち。それはそ

うだろう、魔法を発動させようとはしたものの私のせいで発動は出来ず、その発動させた張本人の私は呼ばれていないのだから。

「ちよ、ちよつと待つてくださいい！」

なんとか立ち上がった一科生の男子生徒が摩利さんに対して反論する。

「何故、僕達だけなんですか!? アイツも使いました!」

彼がそう言つて指差すのは私ではなく、私の横に立つ達也。

それならば、私もであろうと思うが十師族には色々の特権のようなものがあるのでそれを考慮したのだと思いたい。

「いえ、達也は私の魔法を【術式解散】で未然に防いだけだけです。もとより、発動させるつもりはありませんでしたが」

「君、【術式解散】が使えるの!」

「術式解散?」

聞きなれない魔法に首を傾げる摩利さんと、興味津々といった様子で達也へと詰め寄る真由美さん。達也は恨めしそうな顔でこつちを見てくるが冴えないとか言われて黙っている達也が悪い。

「それより、連れていくならそつちの2人はむしろ止めようとしていたので見逃して貰えますか? 特にその子は魔法を使ってまで止めようとしてくれてましたし、ね? 達也」

「…ああ」

「ここで達也の株を少し上げておくのも悪くないと思った私は、敢えて達也へと話を振る。

「ほう、君も見えるのか」

「実技は苦手ですが、分析は得意ですのぞ」

達也の言葉に摩利さんは若干呆れ気味にため息を吐くと、啞然としている一科生たちを連れて行った。

「さ、帰ろ」

思いかげない邪魔が入ったせいで、予定よりも少し時間が押してしまっていた。これで水波ちゃんを1人で待たせるようなことになった時にはあの一科生たちもただじゃおかない。

帰ろうと歩き出した私は直ぐに呼び止められる。

「あ、あの私光井ほのかって言います。さっきは助けてくれてありがとうございます」  
「北山雫。ありがとう、助かった」

私を呼び止めたのは、先程私が庇った2人だった。

別にこの2人は達也たちを馬鹿にしたわけでも、無理やり私たちを誘ったりしてきていなかったのぞそこまで苦手意識はない。

「ううん、無実の人が責められるのはお門違いだからね」

用はそれだけかと思ひ、私は再び帰ろうと歩を進めようとしたがまた呼び止められる。

「あ、あの……」

「ん？どうかした？」

呼び止めた光井さんは口籠っていて中々言葉が出てこなず、振り返った私に若干怯えているような気もした。

「四葉さん、私達も一緒に帰ってもいいかな？」

「もちろん、それと”四葉さん”なんて他人行儀じゃなくて、花楓でいいよ」

「うん、ありがとう花楓。私も雫でいい」

こうして、私は初めてクラスメイトと友達になることが出来た。そのあと、深雪達のおかげで怯えなくなったほのかちゃんとも友達になれ、なんとか水波ちゃんを1人で留守番させることもなかったため、厄日にしては最後にいいことがあった1日だと言えるだろう。

## 5 話

「I—A の四葉花楓」

「I—A の司波深雪」

「I—E の司波達也です」

あの騒動？の翌日の昼休み、真由美さんに呼ばれた私たち3人は生徒会室に訪れていました。

生徒会室のインターホンを押し各自名を告げると真由美さんのいつも通りの明るい声が聞こえてきた。

「失礼します」

頭を下げ、3人とも生徒会室へと入る。

「さ、遠慮しないで座って」

真由美さんに促され上座から私、深雪、達也の順番で座る。特に指定した訳では無いが常日頃から染み付いた癖から自然とそうなってしまう。

「3人ともお昼は？」

「私は持参してます」

「俺たちも」

真由美さんの問いかけに、3人とも手に持っているお弁当を少し上にあげる。

(……………あれは穂波さんが……………)

達也たちの持っているお弁当は十中八九穂波さんが作ったものだ。私のお弁当も水波ちゃんがつってくれたものだから別に不満があるわけではないが、やはり穂波さんの手料理というものは羨ましい。

「あら、自分で作ったの？」

「いえ、私は同居している子が」

「私たちは義姉が作ってくれたものです」

私も深雪たちも決して嘘はついていないが、穂波さんを深雪が義姉呼びをしているということとはそういうことなのだろうか。

「あらそう」

そう言うとき真由美さんは生徒会役員の1人に自分の分を頼むとこちらに向き直る。

「さて、それじゃあ生徒会のメンバーを紹介しますね。摩利の隣にるのが三年生で会計の市原鈴音。通称リンちゃん」

「私をそう呼ぶのは会長だけです」

黒い長髪が良く似合う先輩は、入学式の時に私に話しかけてくれた先輩だった。雰囲気

気からして、真由美さんよりも生徒会長に向いている気がする。

「その隣が二年生で書記の中条あずさ。通称あーちゃん」

次に紹介されたのは先程真由美さんにパシ……頼まれ事をしていた先輩。確かにあーちゃんというあだ名がピッタリと言った見た目である。

「会長！下級生の前であーちゃんは止めてください！私にも上級生としての威厳というものがあるんです」

中条先輩には悪いが、全く先輩の威厳というものは欠片も感じられない。

「あとここには居ないけど生徒会副会長のはんぞーくんを入れた四人が今期のメンバーになります。そして本題ですが、毎年新入生総代の生徒さんには生徒会への勧誘をするのが通例となっています。って言いたいんですけど、花楓ちゃん入れないわよね？」

「そうですね。いざとなれば、国の呼び出しに応じない訳にはいかないのです、生徒会となると厳しいかと思えます」

こればかりはどうにもならない。学校運営に携わる生徒会に不定期で参加出来ないというのは余りいい事ではないだろう。

「わかりました。そこで、次席の深雪さんをお願いしたいのですが、余り物のようで申し訳ないのですが……」



「いえ、喜んで末席に座らせていただきます」

真由美さんの考えとは裏腹に、深雪はすんなり承諾する。深雪はあまりこういうことは気にしないし、私自身こうなることは分かっていたのであらかじめお願いしていた。

(……まあ1時間膝枕しただけけど)

深雪の髪の毛を1時間も撫でられるなんて言う至福の一時を提供して貰えた上に深雪も説得出来るという一石二鳥ぶり。これほどいい交渉が他にあるだろうか。いやない。

「それで俺は何故呼ばれたのでしょうか」

私が回想に耽っていると達也がそんなことを言った。

「それは私から説明するよ」

達也の質問に答えたのは真由美さんではなく、摩利さんだった。

「達也くんと花楓には、風紀委員に入ってもらいたくてね」

「え、私もですか？」

「ああ、花楓はもちろん先日のをあれを見て達也くんも実力は申し分ないしな。それにあの服部が君の名前をあげていたからな。花楓の方も、風紀委員の方は生徒会と違って自由が効くからな」

真由美さんの仕事だとは思ったが、そこまで言われては断る理由もない。それよりも、あの服部先輩が二科生である達也を風紀委員に推すなんてことになるのはあの頃からは想像もできない。

「私はそういうことなら…」

「俺も、服部さんがそう言ってくれているなら喜んで」

達也も服部先輩に推されたのが内心嬉しいのか素直に承諾する。

達也が承諾したタイミングで予鈴が鳴り、生徒会と風紀委員の仕事については放課後に説明するという事でこの場は解散となった。

## 6話

午後の授業を何事もなく順調に終わらせた私と深雪は、クラスメイトたちに囲まれるよりも早く席を立ち急ぎ足で生徒会室の方へと向かった。

「それにしても、危なかったね」

「ええ、お姉様のことをあんな目で見ると……」

周りに人が居ないことをいいことに深雪が呼び方を変えていることは、今更注意してもなおることでもないし、私自身も嫌な気はしないので注意はせず周りへの警戒のみを強めるだけに行っている。

だが、それとは別に深雪がそのうちクラスメイトに危害を加えないか私は心配で仕方がない。

（流石に深雪もわかってるよね……………？）

そう信じたものなのだが、深雪の表情を覗く限り強く確信が出来ない私であった。



生徒会室に着いた私たちを出迎えたのは、昼休みのメンバーに服部さんを加えた先輩方。

ちなみに、先に着いていた達也は既に服部先輩と仲良さそうに話をしている。

(本当に変わったなあ)

服部先輩との出会いは約半年ほど前に真由美さん達に第一高校の勧誘を受け、真由美さんと共に学校案内をしてくれたときである。あの頃の服部先輩は、正直私は嫌いであつた。校内案内をしている時も二科生たちが近くにいるとあからさまに嫌な顔をし、二科生たちの多い部活動の場所は極力避けたりなど、明らかに二科生たちを見下したような態度をとっていた。

元より、真由美さんと十文字さんから差別意識があるということは聞いていたし、その事で真由美さん達が悩んでいることも知っていた私は服部先輩をどうにかしようと考えた。それが達也と出会わせることであり、それが無理なら生徒会から排除するのも厭わないと思っていた。服部先輩の父が穂波さんの元上司であることは知っていたので、私は穂波さんに頼み込み達也と服部先輩に上手いこと接点を持たせることに成功し、結果から言えば服部先輩の意識を変えることに成功した。

それ以来、服部先輩は達也のことを買っているらしく、私があの後学校見学时も二科生のことを馬鹿にするような素振りも見えなくなっていた。

「生徒会副会長の服部刑部です。司波深雪さん、ようこそ生徒会へ」

深雪だけに挨拶をすると、深雪は不満そうな顔をするが私自身は特に気にはしない。理由は言うまでもなく、私は達也と違い服部先輩と仲がいいわけでもなければ生徒会の役員でも無いのだから。

「四葉さんも、忙しい中風紀委員への助力感謝するよ。出来ることなら、生徒会に入つて欲しかったが四葉さんにも立場があるだろうからね」

服部先輩のこの言葉には深雪だけでなく、私も驚いた。人間変わればこんなにも変わるものだとは思わなかったから。

「いえ、微力ですけど学校のために頑張らせてもらいます」

「ああ、それでーっ頼みがあるんだが……俺と模擬戦をしてもらえないか?」

「……はい?」

先程までの良い雰囲気はどこへと消えたのやら、服部先輩がこんな戦闘狂だとは思わなかったが、達也の肩が少し笑っていることから達也が何かを言ったのだろう。

「既に会長と渡辺先輩には許可はとつてある」

こうなった相手に何を言おうと無駄なこととは知っているし、隣の深雪の輝かしい笑顔に逆らえるはずもない。

「……分かりました」

「よし、それじゃあ二人とも着いてこい」

何故か服部先輩ではなく、摩利さんに誘導されるまま私たちは演習場へと向かった。

◇◇◇

第3演習場に到着した私たちは、お互いCADなどの軽い調整を済ませ所定の位置に立つ。その際、服部先輩が私に言ったのは「本気で頼む」の一言だった。

私たちが所定の位置に立ったところで審判役の摩利さんがルールの説明をする。

「……ルール説明は以上だ」

摩利さんの説明したルールは、相手を死に至らしめる術式ならびに回復不能な障碍を負わせる術式の禁止、直接攻撃は捻挫以上の負傷を与えない範囲でなら許可、武器の使用は禁止、素手による攻撃は許可、蹴り技を使う場合はソフトシューズに履き替える、勝敗は一方が負けを認めるか審判が続行不能と判断した場合に決するというものである。

「準備はいいか？」

摩利さんの掛け声に既に準備を完了している私達はお互い頷く。

「では、はじめー！」

掛け声とともに、私と服部先輩はお互いに動き出す。

服部先輩に言われた「本気を出す」というものに答えられるか分からないが、それでもこのルール内での本気を出す。

私は即座に起動式を展開し、服部先輩の周りの重力子を地面へと収束させる。

「……………なっ」

急激に強くなった重力により、服部先輩は膝をつき立ち上がれない。

「そこまで!!勝者、四葉花楓」

摩利さんが服部先輩が行動不能であると見なし、勝敗が決したところで私は重力子への干渉を辞める。

「……………大丈夫ですか?」

「……………はあ。ああ大丈夫だ、わがままを聞いてくれてありがとう」

服部先輩はため息を吐いたあと、ゆっくりと立ち上がりその場をあとにする。

「ところで、花楓。今何をしたんだ?」

傍から見ていた摩利さんたちは何故服部先輩が膝をついていたのか分からないように、私に質問して来る。

「えっと……………秘密です」

特に秘密にするほどの事でもないのだが、説明するには少々面倒なこともあるため、無難に秘密ということにしておいた。魔法の詮索はマナー違反でもあるため、こう言うておけば深く追求されることも無い。

「魔法の詮索はあまり褒められたことではないわね、気になるけど、取り敢えず生徒会室に戻りましょうか」

摩利さんも真由美さんも気にはなっているのだろうが、流石に好奇心を抑えつけているのか毅然とした態度をとっている。

「そうだな、私達も風紀委員室へ行こうか」

私は頷き了承の意を伝えると、摩利さんは歩き始め私達もそのあとに続くようにして演習場をあとにした。



## 7話

摩利さんに連れてこられた場所は凡そ風紀委員の部屋とは思えなかった。散らかり放題のその部屋は風紀を取り締まる側としては如何なものかという疑問さえ抱かせる。

「少々散らかっているが気にしないで掛けてくれ」

「少々ですか?」

この惨事を少々と片付けられる摩利さんの神経はかなり凶太いのでは無いか、そう思ってしまうのは私だけではなく達也ですら目を見開いている。

これではいくら料理を頑張っても修次さんに呆れられてしまわないかと心配になってしまふ。

「渡辺先輩、ここ片付けてもいいですか?」

「なに?」

「魔工師志望としてはCADが散乱している状況は見過ぎせません」

私が口を開くより先に我慢できなくなった達也はそう言うのとテキパキと散乱しているCADを片付けていく。

(魔工師志望ねえ。物は言いようか)

達也の相変わらずの物言いに若干呆れながらも、私も手を動かしてCADの片付けを手伝う。

数分もすれば片付けは済んだのだが、一向にその数は減らずむしろ増える一方であった。

「……………摩利さん、何してるんですか？」

私の視線の先にいる摩利さんの周りには、片付けているはずなのに何故か先ほどよりも多いCADが散乱し、むしろ余計に汚れている。

「うっ……………苦手なんだ。こっぴどいのは」

言われなくてもわかるが自覚があるなら何故手伝ったのだろうか。流石、摩利さんと言うべきか悪い人ではないのだがこの辺りに修次さんの苦労が伺い知れる。

達也も呆れているのか、静かにため息を1つ吐くと摩利さんが散らかした場所を黙々と片付け始める。

「…でしたら、摩利さんはそこに座っていてください。お願いしますから」  
流石の摩利さんもこれには静かに頷いた。



思わぬ妨害があつたとはいえ、30分も経つた頃には風紀委員室は見間違えるほど綺麗になり、私達も一息ついていた。

「こんちわーす」

「こんにちは」

the 体育会系と言うような元気のいい挨拶と共に入ってきたのは、見るからに体育会系の男子生徒2人。

「姐さんいらしてたんですか」

姐さんとは摩利さんのことだろう。と思い、あまりにもイメージと当てはまり過ぎていて吹き出しそうになつた私だがギリギリのところで堪え、急死を脱する。

「痛てえっ」

スパアン！という小気味のいい音とともに、先程摩利さんを姐さんと呼んだ男子生徒の痛がる声が聞こえた。

「姐さんと呼ぶなと何度言つたらわかるんだ」

先程の小気味いい音の発信源は、手にノートを持った摩利さんだった。若干頬を赤く染めている辺り羞恥心から来る怒りなのだろうが、あと少しの所で、私もあれの餌食になつていたと思うと本当になかなかつた。

「そんなポンポン叩かないでくださいよ、ね……委員長」

ガタイのいい男子生徒が頭をさすつているところを見ると、やはり少しは痛いようである。なににせよ、自分が喰らわなくて良かったと思う。

「……ところで、そつちの2人は新入りですかい？」

「ああ、今日からうちに入るようになった。とはいえ、幾らお前らでも女子の方はわかるだろうがな」

「ええ、流石に知らない奴はいないつすよ。でも、こうして見るとあんな風には見えませんがね、」

そう言った男子生徒の値踏みするようなその視線よりも、私には男子生徒の言った“あんな風に”とは四葉の次期当主ということなのか、それとも十四使徒としての事なのか気がなくなってしまった。

「花楓を怒らせても、私は知らないからな。それこそ、命が惜しいならあまり花楓の癩に障るようなことは避けるべきだな」

摩利さんの一言で男子生徒2人は1歩後ろへと退る。

「いや流石に言い過ぎですつて、摩利さん」

まるで化け物のような物言いをされてしまうのは、花の女子高生としてのプライドに傷がつくというものである。

「いや、花楓ならやりかねないだろう」

「私も達也くんに賛成だな、というより花楓を止められる者を私は知らないしな」

私のささやかな抵抗は私を最もよく知る者により否定され、摩利さんにはさらに余計な一言まで追加されてしまった。

「もしかして、ね……委員長そっちの奴も?」

男子生徒は達也と摩利さんの会話を聞き心配になったのか、そんなことを聞いた。

「達也くんは、服部の推薦だ。なんでも、服部と達也くんは何度も模擬戦をしているらしいのだが服部は達也くんに未だに一撃も与えられていないらしい」

摩利さんのその言葉に男子生徒2人は目を見開いて驚く。

「ほんとですかい? そいつは心強え!」

「逸材ですね!」

てつきり、一科生だから信じないと思っていた私と達也は呆気にとられてしまった。

「腕の立つ奴は大歓迎だぜ。俺は3—Cの辰巳鋼太郎だ、よろしくな」

「2—Dの沢木碧だ。二人を歓迎するよ」

「1—Aの四葉花楓です」

「1—Eの司波達也です」

自己紹介をし握手を交わそうとするが、私の前に達也が出て沢木先輩と握手をする。

こういう、さり気ない男らしさが達也のいい所である。

「自分のことは苗字で呼んでくれ、くれぐれも下の名前で呼ばないでくれよ」

明らかに力が入っている沢木先輩の手。普通ならば握手をしている相手にもそれに影響がありそうな程に。もちろん、私ならば握り潰されていただろうが相手が達也では握手が何kgあればそれが可能になるのかは計り知れない。

「ええ、初対面の先輩をそう呼ぶつもりはありませんよ」

そう言うとお返しとばかりに達也は手に力を込める。

「っ!？」

達也の握力に驚いた沢木先輩は思わず手を離す。

「俺の手を握りつぶすつもりかい？」

「お互い様です」

今は達也も不敵に笑っているが、最初沢木先輩が私に向けて手を出してきた時のあの対応の速さから察するに多分私がよく知らない男子と握手するのが嫌だったのだろう。

「へえ、沢木が握力勝負で負けるとはな」

辰巳先輩は何故か実際に体験した沢木先輩よりも達也の握力に一人関心していた。



「そんなことがあったのね。あの子も大概ね」

風紀委員になった夜。摩利さんには色々融通を効かせて貰えることにはなったが、念の為真夜さんに確認を取るために連絡をしたのだが……。私の相談については概ね制約はないため、自己判断で良いということにほんの5分ほどで結論が出た。本来ならばそれで終わるはずだったのだが、真夜さんに入学以降連絡をしていなかったつげが回りに回って現在にまで至る。そんなに達也たちのことが知りたいのならば、本人たちと電話をすればいいと思うのだが真夜さん曰く「それは無理」だそうだ。

「深雪ならまだしも、私なんて……」

「わかっているわねえ、花楓ちゃんも。あなたの魅力は深雪よりも凄いのよ!? 幾ら達也だってこんな可愛い姉弟が居たら知らない男になんか触れさせたくなくなるわよ?」

「は、はあ」

「ね? 水波ちゃんもそう思うわよね?」

真夜さんは私の返事が不満だったのか、見えて居ないはずの場所にいる水波ちゃんに話しかける。

「は、はい!! 花楓さんはー」

そこからは私にとってはただただ恥ずかしい思いをさせられただけだった。達也た

ちの話ならば幾らでも真夜さんの話を聞いていられた私だったが、いざ自分のことを永遠と褒められるという体験はした事がなく、ただ恥ずかしかった。

「あら、もうこんな時間なのね。水波ちゃん、花楓が変なのに引つかからないようにお願いしますね？」

「はい、お任せ下さい!!花楓さんの恋路は私が責任をもつてお守りします!」

主従関係などどこかへと置き去るほどに意気投合した2人が会話を終えたのは、数時間経った頃だった。

「それじゃあ」

真夜さんの一言に大して、水波ちゃんは深く頭を下げ電話が切れる。先程までの打ち解け具合からしつかり主従関係は崩さない辺り水波ちゃんは同世代と比べてかなりしつかりしている。

「さて、水波ちゃん? 言いたい放題言った代償は忘れてないよね?」

「あ、あの……」

私の言葉の意味が分かったのか苦笑いする水波ちゃん。

かなり可愛いが今の私にその手は通じない。

「問答無用っ!」

私は逃げようとする水波ちゃんを捕獲し、抱き枕代わりにして翌朝を迎えた。



私がそれ以来時々、水波ちゃんを抱き枕代わりにして寝るようになるのをこの時はまだ私は知らない。

## 8話

晴れて風紀委員に選ばれた翌日。

摩利さんから忙しくなる一週間と言われたにも関わらず、私は学校を休むハメになつてしまった。

「そろそろ機嫌を直して下さいませんかしら？」

「いくら何でも急過ぎますよ、折角水波ちゃんにお弁当まで作ってもらつたのに……」  
私は今車に乗っているのだが、それは学校に行くためではなくある場所へと連れ去られているからである。

朝、いつもの様に学校に行こうと家を出るなり玄関先にて叔母に拉致られた。

普段ならばこういつた予定がある場合は前日に連絡が来るもののだが、前日の定期電話の時に水波ちゃんと余計な話で盛り上がったおかげで私に言うのを忘れていたらしい。

「……それに、私あの人たち苦手なんですよね」

魔法師の社会的立場の改善をするつもりもなく、ただの生体兵器としか思っておら

ず、有事の際や対外交渉の際には勝手に頼ってくる始末。今回、私が呼ばれたのも後者関係のことである。

「わからなくもないわよ？でも、仕方ないのよ…一応約束してしまったのだから。それにこれは達也のためでもあるのよ」

「……………うう…」

真夜さんの言う通り、3人目の戦略級魔法師である大黒竜也の存在は日本国にとっては隠しておいて得があるかと言われれば全くないと言い切れる。四葉家から圧力をかければ問答無用で黙らせることも出来るのだが、無理に押さえつけて政府から反感を買うのも好ましくない。そのため、達也を隠しておく代わりに私だけを対外的に発表するという形になったのだ。

「花楓ちゃん、諦めて？」

「……………はい」

真夜さんの懇願するような表情に私が反対出来るはずもなく、私は目的地まで車に揺られた。



「お待ちしております、四葉真夜様。四葉花楓様」

到着するなり、仰々しい出迎えと共に出てきた副官の人は私たちに深くお辞儀をするとそのまま奥の部屋へと案内した。

「あつ、花楓ちゃん久しぶり〜!!」

そんな声と共に私へと大手を降つてくる女性が一人。

「…そんなに動いてると危ないですよ、滯さん」

この車椅子の人は五輪滯。私と同じ戦略級魔法師の1人で【深淵】の使い手である。滯さんは歩けないという訳では無いが、移動が楽という理由で車椅子での生活を送っているらしい。

「ようこそいらつしやいました、四葉殿」

「お招きありがとうございます」

久しぶりの再会に挨拶を交わす私と滯さんを横目に、総理大臣と真夜さん、そして軍のトップである防衛大臣の3人は既に話を始めようとしている。基本的に私はこの手の話はノータッチであることが多く、真夜さんに任せている。

「ほら、花楓も一応座りなさい」

私も促されるままに真夜さんの隣へと腰を下ろす。「一応」と付けているあたり、真夜さんも分かっているのだろう。

こうして、新たな戦略級魔法師としての私の立場などが話し合われることとなった。



「それじゃあ、漣さんまた」

「ええ、またね」

長い長い会談を終えた頃には既に日は暮れていた。

特にあの総理たちの魔法師への見下したような視線はあまり好きではないので、私にとつては地獄の時間ではなかった。それは漣さんも同じだったようで話が終わると同時に2人ですぐにその場を去った程。

「花楓ちゃん、あなたあそこまであからさまに逃げることはないでしょう」

漣さんと別れたとほぼ同時に真夜さんが、挨拶を終え私たちに追いついた。真夜さんもあまりいい顔はしていなかったが、それでも最後までいつも通りだったのは流石だと思つた。

「頑張つた方ですよ？あの人たち、私たちを道具か何かだと思つてるですもん」

「否定は出来ないわね…」

真夜さんは苦笑いしながらも私の意見を肯定した。

魔法師が戦争において強大な戦力であることは否めないが、それでも同じ人間にあの

ような視線を向ける彼らと友好的にやるといふのは中々厳しいものである。

「帰りましようか」

真夜さんの提案に私も頷き、葉山さんの待つ車へと向かった。



家に帰った私を待っていたのは達也からの報告だった。

深雪や水波ちゃんからの愚痴は覚悟していたが、達也からのまさかの愚痴のようなものには驚いた。

達也曰く「花楓がいなかったおかげで、お前のファンとやらに狙われた」とのこと。それ以外でも、剣道部の騒ぎを沈静化させたりと今日は大活躍だったようだ。

ファンがいるというのは嬉しいことなのだが、行き過ぎたものやまして達也を狙うとはいい覚悟である。

「……達也に名前聞くの忘れた」

制裁を加えようにも名前が分からない以上どうしようもなかった。翌朝、達也に聞こうとしたが頑なに名前を言おうとはしなかった。

## 9話

新歓による多忙な1週間も大きな問題もなく過ごせたのは、一重に運が良かったからであろう。

とは言え、その一週間のうち殆どをお偉いさん達のせいで潰された私は他の風紀委員たちへの申し訳なきで心がいっぱいいっぱいであった。

「それでブランシユについての情報はある程度集まっているの？」

「ある程度なら。だが、まだ足りないな」

深雪が寝静まった真夜中に私と達也は、達也の家にて小会議を開いていた。

深雪や水波ちゃんに聞かせるには少々グレーな部分を含んでいるための配慮で、最悪深雪ならまだいいが水波ちゃんに関しては彼女には全く関係の無いことでもあることからの選択でもある。

「そーね。あのぐらいの組織なら、私と達也だけでも潰せるだろうけど……、あまり四葉が表立ってやるのは良くないね。少し悪いけど、あちらが動くのを待つのもありかな」  
私は敢えて残酷な方の選択肢を達也に提示する。ここで私がもう1つの選択肢を選

んだ場合、私に強く言えない達也はその方法を鵜呑みにするしかないから。逆に、この選択肢は達也が鵜呑みにするとは私は思わない。

結果私の予想通り、達也は少し俯いて考えてから私の目を見て話し始めた。

「……確かにそれが俺らにとつては最善だろう。だが、もし奴らが行動に移して身近な奴に被害が出た場合に花楓は耐えられるのか？」

予想通りの反対意見。

だが、私の心配をしての反対だとは予想しておらず私は少し驚いてしまった。

「……まさか達也からそんな言葉が聞けるとはね……。でもね……」

あちらが動く前に潰そうとすると、私たち単独で動くこととなる。その場合、警察と鉢合わせた場合に少々面倒なことになりかねない。だから私はブランシユが学校を襲撃することを待つて十文字先輩の協力を仰ぎようと考えていた。

「証拠なら全て消してしまえばいいだろう？ そういうことなら、俺らの得意分野だろう？」  
にやりと笑う達也の表情は悪代官のそれと同じだが、意味合いが全く違う。

こんなこと言われてしまえば、私の答えは自ずと決まる。

「……はいはい。わかったよ、それじゃあ私と達也……それと深雪の3人で行こう。  
水波ちゃんも自宅待機だからね？」

私が先程からドア越しに私と達也の会話を聞いていた2人にもそう告げると、2人は



ドアを開けて部屋へと入ってくる。

「……………お姉様からは隠れられませんね」

「……………私だけ除け者ですか？」

見つかったことが悔しいのか少し苦笑いの深雪とは正反対に少し怒り気味の表情を浮かべている水波ちゃんは少し渋りながら呟いた。

私は水波ちゃんに近寄り、少し膝を曲げて視線を合わせて水波ちゃんの頭を撫でた。

「……………だ、騙されませんよ？」

不満そうに頬を膨らませる水波ちゃんは正直怖さの欠けらも無い。むしろ、可愛すぎでこのまま抱きしめてしまいたいぐらいである。

そんな邪念を振り切って私は一度真剣な表情に切り替えた。

「……………水波ちゃんの実力を疑ってるわけじゃないの。でもね、まだ水波ちゃんにその手を汚して欲しくはないんだよ」

「……………狡いです、花楓さんは…」

「狡くて結構。水波ちゃんにも時期が来たらお手伝いをお願いするから……………ね？」

水波ちゃんは納得したのか、私の背中に手を回して私に抱きついてきた。

顔を見せないということは、そういうことなのだろう。

「あ、狡いですよ！水波だけ！」

水波ちゃんが私に頭を撫でられていることに深雪が反論して、私に向かって頭を差し出してくる。

「…深雪はダメ。本当なら、貴女も置いていくつもりだったんだから、我慢しなさい」

深雪が差し出す頭を左手で制して、私はそのまま水波ちゃんの頭を撫で続けた。

「さて、これからの目処もたつたことだし今日は解散するか」

「…そうだね。それじゃあ、達也情報収集の方響子さんよろしくね」

「……ああ」

私は達也と深雪に別れの挨拶をして、水波ちゃんと共に家へと戻った。

その夜、水波ちゃんと一緒に寝ることになったのは言うまでもないだろう。

## 10話

達也に任せた情報収集は、翌日の夜には完了していた。流石の仕事の早さにだと関心したが、頼んだ相手が響子さんなら当然のような気がしてしまった。

何故、響子さんかとわかったかと言うと一重に今私たちをブランシュのアジトへと運んでくれているのが響子さんだからである。

「それで、相手の規模は？」

「大したことは無い。リーダー含め数十人程度だ」

達也は大したことはないと言うが、普通に考えればこの人数が相手にするには少なくともいない人数だ。

もしこの中に1人でも足でまといになり得る人がいれば、決して余裕などないだろう。足でまといが居ればだが。

「さて、そしたら私は裏から回るから深雪と達也は表からお願い。響子さんは、裏口へ車を回したあと逃げ出してきた人がいた場合お願いします」

「わかった。花楓、気をつけろよ」

「……………誰にものを言ってるのかな？大黒特尉？」

少し意地悪な表情をしながら言った私の意図を察した達也は苦笑いをする。私から目を逸らした。

「それじゃ、潰れますか」

そう言い私は裏口の方へと歩いて向かった。

「うわあああああ」

断末魔が鳴り響く。氷像のように固まっている者、足だけ凍りつき意識を保っている者。その姿は様々だが、全員この世の終わりのような表情をしている。もちろん、その視線の先にいるのはたった一人の少女である。

「もう少し上品な声は出せないのかな？あなた達は私の友人たちを狙ったんだ、覚悟は出来ていたでしょう」

その言葉に反応する者は誰もいないが、少女はため息を一つ吐くとそれ等を侮蔑し先へと進んだ。

「えーと、ここで最後かな？」

あらかたの部屋を回った私が最後に辿り着いた部屋には何も無く、ただ色んな資料が散らばっているだけだった。

「お、お前は誰だ!!」

目の前のドアから焦った様子で入ってきた男は、私を見るなり大声で叫んだ。大方、達也から逃げて来たのだろうがそのまま達也に捕まっていた方が幸せだっただろうに。

「そうね、これでわかるかしら？」

胸元のネットワークスを握り、私はその部屋を夜で包み込んだ。この魔法は真夜さんの代名詞だが私【四葉花楓】の代名詞でもある。今では、氷月真宵の代名詞となりつつあるが。

「まさか……四葉花楓っ」

先程まで息巻いていた男の表情はみるみるうちに絶望へと変わっていった。これも私が氷月真宵であると世間に公表した影響だろうか。

「そうね、それじゃあ……さようなら」

【流星群】はその男の身体を貫くはずだったのだが、貫く前に途中で掻き消されてしまった。

「花楓、重要な参考人だ」

「……わかつてるわよ」

達也に言われなくても四肢を貫く程度で済ませるつもりだったとはいえ、四肢を貫いてショック死する可能性は有り得たと考えたと強くは否定出来ない。

「それじゃあ、達也と深雪は先に帰ってて？ 私は後処理して、彼らの対応しておくから」  
私は遠くから聞こえてくるサイレンの音の方を指さし、達也に言った。一般家庭である達也たちが関わっているのがバレると些か面倒だ。

「ああ、花楓も早く帰ってきてくれ」

「はーん」

達也は私の方を振り向いた後、後ろから来た深雪と共に裏口の方へと消えていった。

私は達也と深雪がある程度離れたことを確認したあと、アジト全てをニブルヘイムに  
より凍りつかせた。

「……これでバレないかな？」

深雪と達也の痕跡を消した私は、その後到着した警察に事情を説明した。

十師族、それも戦略魔法師でもある私への信頼というのは中々なものらしく特に何も  
言われることも無くその場を収めることができた。

（さて、帰りますかね…）

叔母への報告を含め、まだやることはある。何よりも家に置いてきた水波ちゃんのこともある。

(……それにしても、この程度か)

大亜連合関連というから少しぐらい手応えがあつてもいいかと思つたが、少し拍子抜けではある。

真夜さんをいたぶり、穂波さんを危ない目に合わせた、あの大亜連合。少しは奴らに繋がるかと思つたのだが。

「……………くっ」

私の声にならない慟哭は風によつて掻き消された。

## 11話

「四葉花楓の九校戦出場を禁じるですって!？」

ブランシユを潰したことで第1高校が襲撃に合うことも無く、司一によって催眠にかけられていた一部生徒たちも達也によって普通に学校生活を送れている。

そんな中で迫りつつあるビッグイベント「九校戦」の出場選手について大会本部から御丁寧到手紙が来たのである。

「酷いと思わない?花楓ちゃんだって楽しみだったわよね?」

「いえ、戦略級魔法師ということ公表した時点で分かっていたことですから」

学生同士の真剣勝負の場である「九校戦」に国の最高戦力である戦略級魔法師が出場しては、興奮めになるだけ。私自身、学生なのだから別に問題はないと思うのだが、その辺は大人の事情というものなのだろうと理解している。

「真由美。あまり花楓を困らせるな」

「でも、花楓ちゃんまで1種目……いえ2種目は計算していたのよ??それにエンジニアの問題もあるのに………」

真由美さんの言う計算というのは恐らくその種目における優勝のこと。今年で真由



美さん達3年生にとつては最後九校戦になる。それだけでも、熱が入るといふものだが特に真由美さん達は今年で”九校戦3連覇”がかかっているのだから尚更だ。

(それにしてもエンジンニアか…心当たりないことも無いかな)

周囲が認めるかはわからないけど、彼なら問題どころか最強の助っ人だろう。

「まあたしかに、少しは花楓の本気が見れると思っただがな」

未だにぐずっている真由美と対照的に爽やかそうな摩利さんだが、明らかに落ち込んでいるのが見受けられる。

「…私は大人しく応援させていただきますね」

私は少しため息を吐き、一礼してから生徒会室を後にした。

「お姉様、流石です！」

中間試験も終わり、試験結果が発表された日の夜。

九校戦に出れないことが分かっている私にとつてそれほど重要では無いのだが、わざわざ人に負けるのも癪だったため全力で挑んだ。そう全力で。

「……………今回こそ、達也に勝てたと思っただのに」

「何を言ってるんだ？総合1位は花楓だろう」

若干ドヤ顔で言う達也。達也が言うように総合順位1位は私。  
だが……………。

達也のドヤ顔の理由は昼間に遡る。

・ ・ ・ ・

### 中間試験結果

#### 総合

- 1位 四葉花楓
  - 2位 司波深雪
  - 3位 北山雫
  - 4位 光井ほのか
  - 5位 十三束鋼
- 実技
- 1位 四葉花楓

2位 司波深雪

3位 北山雫

4位 森崎駿

5位 光井ほのか

理論

1位 司波達也

2位 四葉花楓

3位 司波深雪

4位 吉田幹比古

5位 光井ほのか

「やっぱり花楓が1番かー」

中間試験の結果というものを張り出すという文化は現代になっても変わることなく、昇降口のところに堂々と掲載されている。

特に九校戦の選手が選ばれる今回の試験に関しては皆の注目度も高く、ここまで堂々と張り出されると少し気恥しいのだが、それでも狙って取れた1位というのは気分がい

いことには間違いない。

「あ、でも、理論は達也が1位なのね」

「エリカっ」

「……………」

深雪がエリカの口を塞ぐが時すでに遅し。私がスルーしていたことは、エリカの口から発せられたことで無視できなくなった。

そう今回、達也に勝ちに行った理論。かなりの自信があつたにも関わらず負けたのだ。それも4点も差をつけられて。

「逆に理論以外は完敗だな」

みんなには私を立てているように見えるように言う達也の巧妙なテクニク……感情が出にくいのをいいことに。

私には達也が内心ガッツポーズをしているのが手に取るようにわかる。

(……………次こそは負けない)

みんなにこの敵意を知られる訳にはいかず、私は1人心の中で対抗心を燃やした。

昼間にそんなことがあってから達也は気分が良い。長い間一緒にいるからこそ分かるが、口角が微妙に上がっているのだ。

「……次は負けないもん」

「ほう、楽しみにしてるよ」

そう言うのと口角を少し上げる達也。これは今日はこの調子のままだろう。これは少し懲らしめてやらないといけない。

「はい、花楓ちゃん、達也くん」

私と達也の間に割って入り、紅茶を置いてくれたのはこの家の家事全般をしている穂波さん。

既に深雪はその手にマグカップを持っているあたり、少し前から居たのだろう。

「ありがとうございます、穂波さん」

一口紅茶を口に含む。

この紅茶を飲むとモヤモヤした気分でも、とても気分が良くなる。それぐらい、穂波さんの紅茶は美味しい。

「そーいえば、花楓ちゃんは九校戦出るの？」

穂波さんの質問だが、これは多分真夜さんの間接的な疑問だろう。恐らく家に電話したが誰もおらず、わざわざ穂波さんに電話でもしたのだろう。

「いえ、私は出ません。というか、わざわざ大会本部から出場禁止って言われちゃいましたし」

そう言った瞬間少し鳥肌が立った。原因の一人は深雪。そしてもう一人は、未だに繋がっている穂波さんの電話の先にいる真夜さん。

「戦略級魔法師が高校生の祭典に出るのは場違いもいいところですからね。仕方ないですよ。まあその代わりと言ってはなんですけど、達也をエンジンニアとして推薦するつもりですけど」

「……？」

「それは本当ですか!?!お姉様!」

私の最後の一言に達也は口を半開きにして止まり、深雪は一瞬にして元気になり、恐らく悪寒が納まったというところは電話先の真夜さんも笑顔になっている。

「うん、真由美さんがエンジンニアで困ってるって言ってたしね」

先程まで気分が良さそうだった達也もこれは予想できなかったのか、未だに驚いたままである。

私は紅茶の最後の一口を飲み干し、立ち上がった。

「それじゃあ、そろそろ私は帰るね。また明日、達也、深雪」

そう言い私は自分の家へと戻った。

家に帰った私を待っていたのは何故か残念そうな水波ちゃんと、口を膨らませた真夜さんだった。

「あれ、真夜さん？なんでここに…」

「試験で1位とったって聞いたから来たのに、家に来てみれば花楓さん達也さん達の家に行ってるって言うし、私が行く訳にも行かないから水波ちゃんと留守番しながら電話で聞いてれば「九校戦には出れない」って言うじゃない？でも、安心して大会本部には私から言っておくから」

この人ほんとに40代なのだろうか。そんな疑問が湧いてしまった私を誰が責められるだろうか。いや誰も責められないだろう。

「お願い致します、真夜様」

「ええ、任せなさい水波ちゃん」

何故か意気投合している2人だが、仲がいいのならそれはそれでいいと思えた。決して当主と従者の関係には見えないが。

「…あまり無茶しないでくださいね」

私は意気投合している2人を置いて自室へと戻り、そのまま眠りにつくことにした。翌日起きた時には真夜さんの姿はなく、水波ちゃん曰く私が部屋に戻ったあとに帰ったとのことだった。



## 1 2 話

翌日、私の元に新しい知らせが届いた。

内容は予想通り、「九校戦」について。昨日の今日ということもあり、その対処の速さには少しばかり驚いたが、内容は私の想像通りであった。

(……………まあ、ここうなるよね)

内容を簡単にまとめると、(四葉花楓の九校戦出場は認められない)である。

長々とその言い訳と取れる説明が書いてあるが、結局九校戦とは学生のための大会などではないということだろう。

悪い言い方をすれば、品評会。もしくは、十師族の力を誇示するための大会といったところだろう。

いくら、十師族とはいえまだ学生。私が出ることによりその力が霞んで見えては本末転倒である。

「…残念です。花楓さんの魔法が見られると思ったのですが」

「まあ、仕方ないよ。それに、私の魔法だけなら見れるから楽しみにしておいて」

私の横で落ち込んでいる水波ちゃんをあやすようにそう言うと、水波ちゃんは首を傾

げている。

もちろん、私の九校戦出場は不可能だが、私は学生である前に戦略級魔法師であり、存在そのものが幻とされた世界最強の魔法師。

つまり、その力をどこかで示す必要がある。とはいえ、私が力を示す相手は国内ではなく国外。いかなれば、私の本当の意味での存在証明である。

「当日になるまでお楽しみだよ」

私は理解が追い付かず、少し放心状態の水波ちゃんの頭上で、家を後にした。

学校に辿り着くなり、私は一人物思いにふけていた。

もとより、十師族。しかも、タブーの一族である四葉の次期当主。さらには、戦略級魔法師ということで私の周りあまり人が寄り付かないのは当然といえる。

そのうえ、皆夏休み前ということもあり旅行の話であったり、九校戦の話などと私は縁遠い話をしているため私は一人物思いにふけているわけである。

(……………達也もエンジンニアとして受け入れられたっほしい私の役割ないなあ)

元よりエンジニアとしてねじ込むつもりではあったのだが、私の推薦ということもあり思いの外すんなりと受け入れられた。

達也自身の能力というのが一番だが、二科生である達也を九校戦メンバーとして受け入れたのは服部先輩たちの後押しも大きかった。

(明日暴れてあげようかな……)

明日には、九校戦の発足式もあり達也と深雪の晴れ姿を見れるはずだったのだが、どこぞのお偉いさんのせいで私は見ることが叶わない。

それも、私たちを外交の道具としか思っていない者たち。

「はあ。憂鬱……」

九校戦の集まりで深雪たちがいない教室で、私のため息に反応する人は誰一人いなかった。

## 13話

「お待ちしておりました、四葉様」

私が到着するなり、見知った顔の人物が私を招き入れた。

本来ならば、今頃九校戦の発足式に参加し達也たち2人の晴れ姿を見ることが叶うはずだった。

それが何を間違えたか案内された部屋に到着した私の目の前には、偉そうな態度のおじさんが並んでいる。

「お待ちしてました、四葉花楓殿」

真ん中の席に腰掛けていた偉そうなおじさんがこちらを確認するなり、重そうな腰を上げて私へと挨拶をした。

普段真夜さんにすら、対等に話そうとする彼が珍しく下手に出ているのは一重に私の機嫌の悪さからだろうか。

私は会釈をし、案内された席へと着いた。

「それでは、さっそくですが今回の議題に移らせてもらいます」

いつも以上に下手から来る彼らに違和感を覚えるが、それもそうだろう。私は四葉の

所属であり決して彼ら直属の戦略級魔法師では無い。

国家直属の戦略級魔法師は滯さんだけであり、私は達也が軍属である代わりにあくまで四葉所属の戦略級魔法師であるという立場である。

もちろん、この国に反旗を翻すなんてことは考えないがある意味自由な立場である私に対して強くは出られないのだろう。

十師族である真夜さんには対等でいようとするとするあたりは、彼らにも意地はあるのだろうが。

「ええ、できる限り手短にお願いします」

今日は発足式には出られないが、その後には深雪たちの九校戦選出を祝うパーティーがある。

それに遅れたとなれば、私の機嫌は最悪になる自信がある。

「え、ええ。それではまず、我が国としては対外的に【戦略級魔法師氷月真宵】の存在を、四葉花楓殿であると発表したのですが、未だに各国としてはその存在を認めていない国も多いのです」

「まあ妥当な意見ですね」

今の今まで存在以外の全てが隠されて来た戦略級魔法師の片割れが、突然名乗り出たのだから簡単に認められるとも思っていない。

まして、氷月真宵という魔法師が本当に存在するということは他国からすれば日本は大きな脅威となりかねない。

「そこで、我々としては一刻も早く氷月真宵もとい、四葉花楓殿の戦略級魔法師としての力を他国に示す必要があると考えております」

(……結局は対外的に強く出たいと)

魔法師は戦争の道具では無い。そんな綺麗事は言うつもりは無い。

元より、戦うための手段である魔法。それを戦争の道具では無いと言うなら、私たち魔法師の存在する意味は無いし、戦略級魔法師なんてものは必要ない。

だからと言って、この国のお偉いさん方のように魔法師を道具としか考えていない人達には少々嫌気がさすというものだ。

「そこです。此度の九校戦、デモンストレーションとして四葉殿のお力を披露してはというのが我々の意見でございます」

「デモンストレーション……」

エキシビションマッチというのは大方予想していたのだが、デモンストレーションは予想の範囲にはなかった。

つまり、魔法師として氷月真宵の存在を示すのではなく戦略級魔法師として氷月真宵の能力を示せと。

「私の戦略級魔法を知っているの、提案であるとは思いますが湖程度では済みませんよ？」

達也の戦略級魔法とは違い、いつかは湖が元通りになるだろうがそれが何年後になるかなんて保証は出来ないし残念ながら範囲指定もそこまで狭く出来ない。

なにより、近隣への影響だって馬鹿にならない。

「ええ、もちろんです。その際には、日本近海の渡航を禁止致しますので全力で海に放つていただければと。もちろん、太平洋諸国には既に了承は得ています」

海ならば問題はない。なんてことは言わないが、私の戦略級魔法を知っていて言っているのだから、私が心配することはない。

なにより、太平洋諸国の許可がおりているならば気にすることもないだろう。大方、他国も私の戦略級魔法を知っておきたいという目論見だろうが、見たところで絶望しかないと思うのだが。

「ええ、概ねわかりました。そのデモンストレーションは、大会の初日ということでしょう？」

「その予定でございます。その日1日、太平洋諸国の船は全て取り払うとのことですので、存分に」

「了承しました」

私は形だけの文書に捺印だけし、直ぐにその場から去った。

これ以上話すこともないし、彼らの目の前にいるのもあまり気分が良くない。

~~~~~

「相変わらずの態度じゃな」

花楓が去った後の会議室は、疲労と切れた緊張によるため息で埋め尽くされていた。

「彼女の政府嫌いは我々に非がありますからね」

ここにはいない現首相の政策や、態度がその大きな原因であることはここにいる誰もが周知のこと。

もちろん、彼らはそんなこと口にはしないがそれでも思うところはあつた。

「なにより、こんなデモンストレーション行うこと自体道具であるつて言っているようなものですかね。あまり彼女の不満を買つて四葉丸ごと他国へなんてこと起きたら我が国は終わりでしょうね」

「ああ。それが起きないようにと四葉真夜を懐柔しようとした結果が今の彼女の政府嫌いじゃからのお。これ以上、彼女に不満を抱かせないことしか我々には出来んの」





「疲れたあ」

パーティーも終わり、自宅へとたどり着いた私は水波ちゃんを抱き枕代わりにしてソファーに横たわっていた。

「お疲れ様です、花楓さん」

こういつた時の水波ちゃんは、穂波さんと同等ぐらいの母性を出してくれる。唯一違う点は私に抱き枕代わりにされていることぐらいだろう。

そんな母性の塊である水波ちゃんに癒されていると、玄関のチャイムが鳴った。

「誰かな、私の癒しを奪ったのは……」

チャイムが鳴るなり、私の手元を離れ玄関へと向かってしまった水波ちゃん。人と用事によつては、その人物に恨みをぶちまけてしまいそうである。

「花楓さん、お客さんですよ」

そう言つて水波ちゃんが連れてきた人物の姿を見て、私の恨みは綺麗さっぱり消え去った。

「お姉様ー！」

それだけ言うと、水波ちゃんの背後から現れた深雪は私へとダイブしてきた。

(……なるほど、だからパーティーで寄ってこなかったのか)

深雪とは最近話せていなかった。会ったとしても少しの時間だけで、こうして姉妹として過ごせていなかったのだ。

お互い忙しかったとはいえ、これは達也に任せ切りにしていた私の姉失格である。

「よっよっ……」

私は抱きついてきた深雪を抱き締め返し、頭を撫でてあげた。

深雪は頭を撫でられたのが嬉しいのか、そのまま私に身を預け少しするとそのまま寝てしまった。

「ありやま、水波ちゃん達也呼んできてもらってもいい？」

「あ、かしこまりました」

このまま寝かせてあげてもいいのだが、風邪をひかせても困るため私は呼ばれて来た達也に深雪を預けた。

その際達也も若干私を見るなり寂しそうだったので、頭を撫でてあげたが珍しく顔を赤らめたのには驚いた。

「それじゃあ、私たちも寝よっか」

「そうですね」

ひと段落つき、私は再び水波ちゃんを抱き枕代わりにしそのまま眠りについた。